

うそっ、侯爵令嬢を
押し退けて王子の婚約者(仮)に
なった女に転生？
～しかも今日から
王妃教育ですって？～

◆ ————— ◆
天富七緒
Nao Amatori

人物紹介

Characters

ステファニー

優秀だと評判の侯爵令嬢。ビンセントの婚約者であったが、彼に嫌われていて婚約を解消された。

ビンセント

この国の王太子。
これまで優秀な侯爵令嬢と婚約していたが、ソフィアと出会ったことでその婚約を解消。
ソフィアを溺愛する。

キャサリン

ビンセントの母でこの国の王妃。
ステファニーを気に入っている。

アルベルト

隣国の王子。
何やら思惑がありそうで……!?

ソフィア

突如、常識的な日本人女性
の自我が蘇ってしまった子爵令嬢。
それまでの『ソフィア』
のお花畑ぶりに戸惑いを隠せない。

目次

うそつ、侯爵令嬢を押し退けて
王子の婚約者（仮）になった女に転生？
ゝしかも今日から王妃教育ですって？ゝ

書き下ろし番外編

【とある伯爵令嬢】

うそつ、侯爵令嬢を押し退けて

王子の婚約者（仮）になった女に転生？

くしかも今日から王妃教育ですって？く

プロローグ

本日より王宮にて子爵令嬢の王妃教育が始まります。

王太子殿下と子爵令嬢の出会い、学園で彼女が不注意により殿下にご迷惑をおかけしたこと。その後、彼女は何かと殿下にお世話になり、二人は徐々に親密な関係になっていきました。

学園での子爵令嬢の立場は良いものではありませんでした。

彼女が殿下と親しくするのを不快と感じる方々がいらつしたのです。

その方々の中には殿下の婚約者様もおられました。

そうです、殿下には幼い頃より王妃様がお決めた婚約者がいらつしたのです。その婚約は政略によるもので、お二人の仲は良いと言えるものではありませんでした。学園でも一緒にいることは殆どなく、パーティーでも殿下が婚約者様をエスコートなさることは一度もございませんでした。

殿下から婚約者様に贈り物一つしたことがないというのは有名な話です。

ただし、婚約者様にはなんら瑕疵かしはございません。それどころか、誰もが彼女を次期王妃様と認めておりました。

あれほど完璧な令嬢は他の国にもいないではありませんか？

そんな中で、殿下お一人が婚約者様をお認めになりました。殿下は完璧すぎる婚約者様を遠ざけていたのです。

殿下の側近の方達は殿下のお気持ちを感じ取っていたのでしょう。なるべくお二人が一緒になさることのないように気を遣つかっていたようです。

婚約者様は殿下の婚約者候補の中で最も家の爵位が高く、能力も申し分ない、見た目もお人形のように美しい方でした。

ですから、彼女は王妃様のお気に入り、すぐに婚約者となりました。

当人達の仲が悪くても国政と比べれば些細ささいなもの。皆、見て見ぬ振りをしたのです。

婚約者様が社交界デビューの日に着たドレスは王妃様が殿下名義で贈ったとは、有名な話です。

それらのことは貴族の間では公然の秘密でした。

それでも婚約者様から殿下を奪おうという不届き者は………おりましたが、殿下の

お心を射止める方はいませんでした。

——学園に入学するまでは。

学園で多くの人達と交わって見聞を広めていく中で、殿下は一人の令嬢に出会います。彼女は子爵令嬢とはいえ、貴族とは思えない品のない振る舞いをする人でした。

人との距離がとて近く、明けすけに自分の感情を表します。表情にはつきりと喜怒哀楽を示し、気持ちを遠慮なく口にする。

そんな分かりやすい人間でした。

王太子殿下曰く、彼女といると楽になれるそうです。

逆に婚約者様がお傍にいると息が詰まるとか。

長年の婚約者様との苦悩の日々から子爵令嬢が解放してくれたと、二人の仲は急速に深まっていきました。

殿下と子爵令嬢との会話は途切れることはありません。

彼女は何を見ても何を聞いてもいつも楽しそうで、素直に驚く。

ただニコニコしているだけで感情が読めない婚約者様とは違っていたのです。

待ち望んでいた人間としての反応に、殿下は心を躍らせました。

そのお礼にと、子爵令嬢にドレスと靴を贈ったそうです。

その時、殿下は初めて令嬢に贈り物をしました。

そして、殿下の誕生日を祝うパーティーの最初のダンスのパートナーを子爵令嬢が務めました。

それは、社交界に激震を走らせました。

今まで誰ともダンスをしなかった殿下が婚約者でもない子爵令嬢とダンスをしたからです。

ここまですぐと最悪の結末を迎えるのではと、誰もが懸念しました。

だが、それを口にする者はいません。

不敬だというのではなく、口にすることで現実になるのを恐れたのです。

何事も起こりませんようにと誰もが見守っていました。

唯一、婚約者様と仲の良い学園の生徒達だけが耐えかね、子爵令嬢へ辛く当たってしまいました。

そのような行動が耳に入り、殿下の気持ちは婚約者様から離れていく一方。

もう二人の関係修復は不可能だったのでしょう。

学園の卒業式に、殿下は自身の婚約を解消いたしました。

卒業生全員の前で宣言されたため、婚約解消はすぐに公になります。

そしてその時、殿下の隣にいた子爵令嬢が新たな婚約者となりました。誰も認めない婚約者が誕生した瞬間です。

そのようなわけで、今日から王宮にて王妃教育が始まります。

——その子爵令嬢が、今私がつ持っている身体の女性だった。

名前はソフィア・グレゴリー、子爵令嬢。

つまり私はこの国の王太子であるビンセント・アセトン殿下の婚約者になった。

1

ただ今、本日より始まる王妃教育のため、私は王宮へ向かっていた。

一生王宮になんて着かなければ良いのにと本気で願っている。

だって、ソフィアは婚約者がいる男性に無責任に近づき奪い取った女。

私はそんなこと一切望んでいない。

何故、流行りのざまあ展開が起きなかったんだ？

侯爵令嬢様は転生者じゃなかったのね……

そう溜め息を吐く。

——ビンセント殿下との出会いは偶然？ ご迷惑をかけた？

いえいえ、あれは計算されたものだ。

私は子爵令嬢の記憶を覗けるのだが、教科書とノートを持ったソフィアがわざと殿下が来るタイミングを見計らって突撃したのを覚えている。

勿論、王太子殿下と分かりながら、知らない振りをして馴れ馴れしい態度で近づいた

のだ。

殿下が侯爵令嬢であるステファニー・グロッサム様と婚約していたことも知っていた。彼女は幼い頃より様々な教養を身につけ、教師からの受けも良い。完璧な淑女。

一方、ビンセント殿下のほうは人間味がある？

……とても良い言い方ですね。

実際は、ただのワガママ駄々っ子なのだ。

子供なら許されるけれど……

学園は可もなく不可もない、剣術もある程度こなすが、自分より明らかに実力のある者を避け自身の能力と向き合おうとしないと言われている。

使用人への態度も悪いらしく、「お仕えしたくない方」と噂されているほどだ。

王族を護衛する騎士にも不遜な態度で反感を買っている。

殿下の態度は婚約者様に対するものが一番酷く、侯爵令嬢という立場の方に対してとても無礼だった。

彼はご自身より能力の高い彼女に対して苦手意識があったようだ。

そんなことはないといくら周囲の人間が話しても、卑屈になり、侯爵令嬢を避けていた。

殿下が努力していないわけではないのを私は知っている、ただステファニー様が優秀すぎるのだ。

殿下は侯爵令嬢が絡むとまともな判断ができないほど萎縮していた。

決定的だったのは彼女の社交界デビューでの事件だろう。

パーティーのエスコートは婚約者が務めるのが常識だ。

殿下だって侯爵令嬢をエスコートするつもりでいた。

けれどパーティー三日前に、学園に入学するための能力を見極める剣術の試験で足を怪我し、エスコートを断念せざるを得なかったのだ。

事実を知らない貴族達は、エスコートを拒否した殿下を愚か者、卑怯者と扱き下ろした。その心ない言葉はしっかりと殿下の耳に届いていた。

それをきっかけに、殿下は完全に侯爵令嬢を拒絶するようになったらしい。

けれど、どんなに二人が不仲であっても、ステファニー様を大層気に入っている王妃様は婚約解消を許さなかった。その頃から、殿下は王妃様のことも避け始めたようだ。

そして、殿下は例の伯爵令嬢との出会いを果たす。

淑女教育をきちんと施された令嬢にしか会ったことがなかった殿下にとって、ソフィアは新鮮だったに違いない。

よく笑い単純なことで褒めてくれる子爵令嬢に心が癒いされていったとか。

侯爵令嬢に無言の圧力をかけられ常に完璧を求められて気の休まる暇がなかったところに、弱音を吐ける存在が現れた。

殿下は自ら子爵令嬢を捜すようになる。

婚約者でもない令嬢を殿下のお傍にいさせて良いものかと戸惑とまどっていた側近達も、今までとは全く違う明るい表情の殿下を見て、二人を引き離はなせない。

婚約者や貴族達からの重圧に押し潰つぶされそうになっている殿下を常に傍で見てきた彼ら。

心が壊れてしまう寸前で差しのべられた手にするのには、仕方がないように思えた後から聞いた。

殿下の心が守られるのならと側近達は子爵令嬢の存在に目を瞑つむる。

けれど、まさか殿下の誕生日パーティーにソフィアをエスコートするとは、予想だにしていなかっただろう。

その時のソフィアはドレスも靴も、全てが殿下の瞳の色をした品を身につけていた。

それを見て会場にいた者は絶句する。

凡庸ほんようでおとなしい殿下がそこまで婚約者を蔑あひがしろにする行動に出るとは、誰も考えて

いなかったのだ。

その後も殿下は子爵令嬢の隣では堂々と胸を張り、まさに王族らしい威厳さえまとうようになる。

それほどまで子爵令嬢の存在は殿下にとって大きなもの。

この光景を見て、殿下の婚約者である侯爵令嬢はどんな反応を示したかというと、令嬢はいつものように優雅な笑みを浮かべていた。

——まるで人形のように。

側近達はこのにきて漸ようやく、殿下の感じていた侯爵令嬢に対する恐怖を体験する。

どのような事態が起きてても表情を崩すことのない、完璧すぎる女性。

以降、彼らは積極的に子爵令嬢との密会を手伝った。

幼い頃より傍にいる側近達には、殿下の苦悩が全て分かっていた。だから、殿下が殿下であるために、子爵令嬢の存在を黙認する。

けれど、他の貴族はそうはいかない。

次第に身分の低い子爵令嬢は嫌がらせを受けるようになる。

初めは、子爵令嬢は淑女教育がなっていないという正論。

婚約者のいる男性に近づくなというのはごもつともなので、側近達もあえてソフィア

を助けはしなかった。

だが次第に、子爵令嬢のものを破壊したり、春とはいえ、まだ肌寒い時期に噴水に突き飛ばしたりする者が現れ始める。

これ以上は看過できないと判断した側近達は殿下に報告、殿下は嫌がらせをした者達を呼び出して尋ねた。

彼らの言い分は、婚約者である侯爵令嬢が痛ましく見ていられなかったとのことだ。

そして、殿下が間違っていると発言する者もいた。

その態度に、殿下への敬意が全く感じられないと側近達は感じたようだ。

殿下は処分を下すと宣言したものの、王妃陛下の力によって彼らは何のお咎めもなく学園生活を続けた。

お陰で殿下はまたも自身の無力さに悩まされることになったのだ。

そしてますます子爵令嬢の天真爛漫さに救われた。

だから卒業パーティーでのビンセント殿下の振る舞いは、起こるべくして起きたもの。側近達にとってはさほど驚くことではなかった。

婚約解消を宣言する殿下は、緊張はしていても生命力に満ち溢れている。これで少しでも殿下が楽になれるのであればと、側近達も協力するつもりだ。

ただ問題は、子爵令嬢にある。

侯爵令嬢が行っていた王妃教育を彼女がこなせるとは到底思えないというのが、側近達の素直な意見だ。

幼子でも知っている礼儀作法すらままならないのに、王妃としての振る舞いを身につけるのには何年かかるのか……

三日もしないで逃げ出すのでは？

王妃教育が終了次第、名のある高位貴族の養子にならないと身分的にも釣り合わないのに、このままではまともな高位貴族は誰もソフィアを養子にしないだろう。

それどころか、王妃教育の厳しさを利用して子爵令嬢を貴族社会から追い出す計画を立てているようだ。

彼らの計画通り子爵令嬢が逃げ出した場合、殿下の立場は更に悪くなる。

それだけは避けなければならない。

子爵令嬢を王妃ではなく側妃にすれば何の問題もなかったかもしれないが、殿下自身は傍に侯爵令嬢がいるのを許せなかった。

こうなると側近達にできるのは、王妃教育の先生方を味方につけること。それしかなかった。

馬車の扉をノックをされ、私は王宮に着いたことを知らされる。鍵が壊れて開かなければいいのと思うものの、馬車の扉は無情にも開かれた。馬車から覗く空は眩しいほど澄み渡る青空で、この世の全ての穢れが取り払われているとさえ感じる。

この子爵令嬢から穢れがなくなったら、何も残らないだろうな。それなのに私は何故ここにいるのだろうか……

眩しすぎる太陽に目を細めながら、現実から目を逸らしたい気持ちで一杯だった。

だって……「だって」って言うなってお母さんに怒られていたけど、今は許してほしい。

だって、これから始まるのは王妃教育。

やらかした人の尻拭いで私が王妃教育を受けることになった。皆が失態を望み、罰を下そうとウズウズしている状態。

見た目は同じでも中身は別人なんです……なんて、誰も信じてくれない。

倒れてしまいたいと思うのに、健康体な私はしっかりとした足取りで一步を踏みしめる。するとそこには、現実とは思えない光景が広がっていた。

見目麗しい男性が素敵な笑顔で待ち構えている。

まるで映画のワンシーンのような光景は、他人事のように美しいとさえ感じた。

……映画のワンシーンだったらただけ良かったか。

目の前にいる彼は私をエスコートしてくれるらしい。

何故私をエスコートするのかというと、私が彼の婚約者を名乗り出たせいだ。

実際のところ、私にはあまり実感がない。

彼は王族。

そう、物語とかに出てくる王子様。

何も知らない幼い頃であれば、いつか白馬に乗った王子様が現れるなんて夢を見られただが……

そういうのは夢で良いんだ。現実には甘くないことを、前世である程度の年まで成長していた私は知っている。

王子様の相手には、それなりに教養だの人脈だのが必要で、精神的にも強い人間でないと無理だ。

もしくはプレッシャーなど感じない、自身が置かれている立場が理解できないほどの能天気。

ところが、前世の私は周囲を気にしながら目立たないように生きてきた人間だった。そんな私が王子様の新たな婚約者なんて努まるはずが……

第一、この身体は、子爵令嬢という立場。

この国の貴族は上から公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵からなる。

ソフィアの父は上から四番目、下から二番目の子爵だ。

一応貴族の端くれで、王宮に出入りが許されているが、高位ではない。

そんな下位貴族の令嬢をわざわざ王太子殿下自らエスコートなさるなんて……

ソフィアは子爵令嬢ですよ？

殿下がわざわざエスコートなさるような身分の人間じゃない。

私は現実逃避しながら殿下にエスコートされ、王妃教育を受ける部屋に案内される。

逃げ出せるものなら逃げ出したい。淑女にあるまじき行為——スカートをたくし上げ猛ダッシュで走り去りたい。

だけどそんな考えも、厳かな王宮に一步踏み入れた瞬間に消えた。

突き刺すような視線を全身に感じ、心臓が捕えられたみたいに痛む。

身体が硬直し思うように動けないのに、足だけが勝手に進んでいた。

誰かに操られているのか、私の意思とは逆に身体が恐ろしい場所へ吸い込まれる。

すれ違う使用人の視線から、今私が置かれている状況が予想通り最悪なものだと知る。予想が外れてほしかった。

この空間全てが私を拒絶し、空気が重く息苦しい。

立ち止まった扉の向こうにいるであろう人物に、私は叩きのめされるに違いなかった。殺されることはないかと分かっていても、恐怖で足が震える。

王妃教育は「教育」であっていじめや嫌がらせ、精神的苦痛を与えるものではないが……

立ち姿、座る姿勢、歩き方、お辞儀の仕方、カップの持ち方、ダンス、国の歴史、政治、経済、芸術、賓客のもてなし方その他、諸々をこれから教えられる。暴力を受けることはない。

できなければお叱りを受けるが、それ以上のことはされない……はず。

とにかく、私を貴族社会から追い出すための地獄合宿が始まるうとしていた。

あの……泣いても良いですか？

恐るべき王妃教育が始まった。

私は……今までの甘えを全て叩き直され、身も心もボロボロに……

……と思ったのだが、思いの外、普通だ。

まずは礼儀作法から始まり、立ち姿、座る姿勢、歩き方を教えられる。

今まで意識したことがないことを細かく指導され、いかに普段の姿勢が悪かったのかを知った。身体中の骨と筋肉が悲鳴を上げるが、間違ったことを教わっているわけではないので、やりがいがあり充実している。

よく考えると、王族が学ぶ高レベルなマナーを学べるなんて超ラッキーなのでは？
ぜいたく贅沢すぎる環境に興奮が収まらない。

たとえビンセント殿下との婚約が解消されたとしても……それは時間の問題だろうし、正しい姿勢を身につけておいて損はない。

この世界の何を何も知らない私には、一流の教師陣に学べる環境はとても有難かった。

私が目覚めた時には学園を卒業していたので、この王妃教育には本当に感謝している。今後も貴族でいられるか分からないが、知識は一つでも多いほうがいい。

先生方は私に厳しく接して、私が王子に泣きつくのを待っている。

そのため、嘘を教えるはしなかった。

私は王族が受けるような教育を「無料」で受けているのだ。

今の環境に「もったいない」が口癖の祖母に育てられたので、文句なんて言うはずもなく、私は教師の教えにしがみついた。

一流の先生からの言葉は素直に聞く。

多少は、嫌みを言われ、侯爵令嬢と比較はされたがどうということはない。

仕方がないことだと理解している。

前と今の婚約者を比べ、家にとって利益のある選択をするのは貴族であれば当然のこと。それが王族であれば尚更だ。

以前の私——ソフィアがしてしまったことの代償だと受け入れるしかない。

前の婚約者は長年国を支えてきた侯爵家の愛娘で、本人も優秀だと評判だった。

そんな人を押し退けて王太子の婚約者になってしまったのが、特別な取り柄もない子爵令嬢。

誰が見てもこの婚約は間違っている。

何故ビンセント殿下がソフィアを選んだのか私にも分からない。

もう少し早く私が意識を取り戻していたら、こんなことにはならなかった。

起きてしまったことは仕方がない。私は私にできることを精一杯するしかなかった。

真面目に教育を受けていると、教師の思いが伝わってくる。

厳しく冷たい印象の彼女だが、侯爵令嬢に対する愛を感じた。きつと侯爵令嬢に教えていたのもこの方だったのだろう。

教師の中には、「前任の方が新たな婚約者には教えたくないということ、代わりに私が選ばれました」とご丁寧に教えてくださる方もいた。

王族の依頼であつても断る人がいたのに、目の前の方は承諾してくれたということだ。優秀な侯爵令嬢に教えていた方が、侯爵令嬢の婚約者を奪った私に教えるのを不快に思うことは仕方がない。幼い頃より手塩にかけて育て上げた完璧な令嬢の地位が、この馬の骨だか分かん女に無意味に奪われたのだ。恨みたくもなるのに、再び王妃教育を受け持った。

王族の要望では断りづらいとはいえ、怒りが込み上げたに違いない。

それなのに私への対応は常識の範囲に収まっている。それはここにいる人達が誇り高いからだ。

本当なら闇討ち暗殺・毒殺されていてもおかしくない。

あーあ、そんな女に転生するなんて!!

嫌すぎる。

せめてソフィアがざまあされていたら、彼女の後の人生を自由に生きられるのに。

なんで略奪成功しちゃってるかな。

私にはソフィアが理解できない。

私、何か悪いことしちゃったのかな？

ソフィアになつてゐるつてことは、以前の私は死んだのよね。

なんで？ 真面目に生きてたのに……

確か、彼氏に浮気されて捨てられたことは覚えている。浮気するような男なんて最低だつてふつ切つて、就活に専念していたはず……

その後のことが思い出せない。

今の私って前世を思い出した状態？ それとも事故とかにあつて生死をさまよつてゐる間に見ている夢が今？

頬をつねった感触からして夢ではない。

となると、前世を思い出したか、憑依したか……

いくら悩んでも正解は分からない。今の私は与えられた環境で全力を尽くすのみ。勝手に環境を変えることは許されない。

置かれた状況で一日でも長く平穏に生き延びようと、改めて心に誓う。

神様、真面目に過ごすのでどうか私を殺さないでください。

【王妃教育を担当する者】

どんな令嬢が来ようと、私は手を抜かない。

王妃陛下の命により、私は王太子殿下の新たな婚約者の教育係を請け負った。けれど、その女を次期王妃と認めることは決してないと思う。

前の婚約者のステファニー様はとても素晴らしかった。

幼い頃より私が教えてきたんだもの。

もの分かりも良く淑女教育も滞りなく進んでいた。

もつとも、これならばと王妃教育を嬉々として進めたが、ある時から躓き始める。

その後は、本人の努力で及第点といったところだ。

けれど、あの子はちゃんと努力をしていた。

確かに私から見ても殿下との関係は良好ではなかったが、次期王妃として頑張っていたし家柄も十分だ。

彼女が王妃であることに貴族からの反対は殆ど出ないだろう。国としてはいらぬ諍

いを抑えられる。

王家にとって問題のない相手だ。

父の侯爵は社交的で恨みを抱かれる人物ではない。

いい人が嫌いという人間がいるのであれば、侯爵は嫌われているかもしれないが、そんな人間は極少数だろう。

そんな侯爵の娘だ、誰もが問題ないと判断していた。

だが、殿下とステファニー様の相性は信じられないくらい悪かった。

学園での様子までは知らないが、社交界での噂は私にも届いている。

侯爵令嬢と不仲というだけならまだしも、婚約者のいる殿下が子爵令嬢に現を抜かしているなど信じられず、私はある時、ステファニー様に確認を取った。

「――私が至らないばかりに、先生にまでご心配をおかけして申し訳ありません」

そう言った彼女の言葉で噂は事実なのだと知る。

貴方は悪くないと言いたかったが、貴族社会では婚約が解消になるのは女性の恥に繋がる。女性側の責任にされてしまうのだ。

彼女に酷なことを強いている。それは分かっていた。

それでも私達はステファニー様を解放することはできない。

全ては国のため。令嬢本人もそれは分かっていたことだろう。
私がそう教えたのだから。

王族になるとは国を背負うということ。一時の感情に振り回され安易に行動してはならない。

私は令嬢にはちゃんと教えた。

なのに、王太子担当の者は何を教えていた？

多くの者が参加する卒業パーティーで婚約解消を言い出すなど、考えられない。

国王陛下の許可がないことも言語道断だが、醜態を晒すとは……

愚かな行為を耳にした時は理解ができず言葉を失ったほどだ。

不快感を表情に出すという失態を、不本意ながら犯してしまった。

何故このようなことになった？

悔しくて堪らず、怒りで全身が震える。

今から来る子爵令嬢について、渡された資料を私は何度も読み直した。

身分については気にしない、私が重視したのは教養だ。

資料には彼女は淑女教育も学んでおらず、学園での成績も這いずるような結果とある。

褒められる点はないにもかかわらず、王太子殿下の婚約者になろうと考えるなん

て……

彼女とまともな会話ができるとは思えない。

貴族社会を知らない平民が殿下に近づいてしまった……それならまだ納得できるのだが、彼女は貴族。人の婚約者を奪う行為にどれほどの代償が伴うか教えられているはず。

その程度のことも理解できない頭なの？

ビンセント殿下とステファニー様が不仲なのは事実なので、これまでもあわよくばを狙う令嬢は多数いた。だが、皆、側室目当てだ。

侯爵家を敵に回すことはなかった。

ステファニー様に問題があればまだ、婚約破棄という選択肢もあっただろう。だが、そのようなことは無い。

完全な殿下の有責で、王家の恥だ。

ビンセント殿下がこのようなことをしてかしたのは、子爵令嬢と関わることで正常な判断ができなくなった結果だろう。

元からここまで愚かだったとは思いたくない。

そんな令嬢を教えなければならぬなんて……

王妃様の命でなければ引き受けなかった。

考えれば考えるほど怒りで震える。
そんな私の思いなど知る由もなく、件の令嬢が現れた。

私の傑作を破壊した凡人。

貴方に何か仕掛けるつもりはない。

私は私の仕事をするまで。

私の教えについてこれないのであれば、それまでのだ。

私は静かにソフィアを待った。

ソフィアがどんな無礼を見せるかと期待したが、思いの外問題がなかった。

勿論、立ち姿、歩き方、座る姿勢は、使用人のほうが良い。

これに教えるのかと溜め息が出そうになるほどのだ。

だが、私は完璧な淑女。どんなに不快であろと、顔に出すことはない。

歩く音が耳障りでも、背筋が曲がり手が下品に宙を漂っていても、不快感を態度に出

すことは許されないのだ。

そう教わり、教えてきた。

私は静かに子爵令嬢から汚いものを全て削ぎ落として差し上げる。今の彼女の振る舞

いは一切残らないだろう。どのくらいもつかしらね。

そう思っていたのに、おかしい。

令嬢は確かに何もかもがなっていない。見ていて不快だった。

けれど、一つ一つ私が指摘するとそれを素直に聞き入れ、改善しようと努力する。

嫌みのように侯爵令嬢を引き合いに出しても、感情を露にすることなく静かに頷くだけだ。

貴族としての立場を理解せず他人の婚約者に手を出す浅はかな女なら、すぐにわめき散らして部屋から走り去り殿下に泣きつくと思想したのに、逃げ出す様子は一切ない。

簡単に挑発に乗らない姿は評価できる。

もしかや私を取り込むための演技なのかと身構えたものの、彼女は真剣に学ぼうとしていた。教えがいのある生徒と誤解してしまいそうなくらいに。

このような経緯でなければ、この生徒に教えるのを楽しめるだろうと感じるほど、ソフィア嬢は報告書とは違っている。

与えられた責任を果たさず、何の努力もしないで男にすがりつくことしかできない女ではなかったのか？

まで書かれていたのに。

報告書を作成したのは厳格な男。

感情に流されず、物事の状況を冷静に判断するので、貴族社会で最も信用されている。一切の甘さを見せない融通のきかない人間なのは間違いない。

そんな人の仕事を疑う気はない。

ならば、私が騙だまされているのか？ 目の前の女は私を騙すために、従順で清廉な人間を演じているのか。

ステファニー様——侯爵令嬢が嫌がらせや暴行をするはずがないのに、この女ときたら、「平民なら地べたを這いずり回っている、貴族のマナーが身につけていないなら学園へ来るな」などと酷いことを散々言われたと殿下に泣きついたと聞いている。殿下もその言葉を真まに受けたとか。

彼女は健気けんげに耐えていた、と。

どこをどう見たら健気に映るのやら、勉強しろマナーを身につけると遠回しに言ったのを、自分の都合のいいように解釈し大げさに触れ回ったのだろう。

報告書を手にした時は、震えるくらいの怒りに駆られた。

けれど、目の前の女は偽物ではないのかと疑うほど報告書の人物とは違う。

私は優秀な人間が好きだが、同じくらい努力している人間も評価する。

もしや、私のそういう情報がこの令嬢に漏れているとか？

殿下や側近達に頼んで情報を得たのであれば、恐ろしい令嬢である。

しかし、経歴はどうであれ、教えたことを身につけようとする姿勢は評価できる。彼女を受け入れてしまいたいそうだ。

いけない。この女はステファニー様の婚約者である殿下を誑たぶらかした人間。人の懐かたしろに入るのに長たけている。

私まで簡単には誑かせるとは思わないでちょうだい。私に取り入ることは、貴方のような浅はかな人間には決して無理なこと。人生経験の浅いビンセント殿下や色仕掛けに弱い若輩者とは違うのよ。

……さて、次はどうしましょうか。

私は決して楽しんでるのではない。

彼女がどこまでついてこられるのか見極めているだけ。

ソフィア嬢は今までも何も勉強してこなかったのだろう。幼子でも知っているような国の成り立ちを知らなかった。呆れるのを通り越して、恐ろしいほどの無知。今までどう生きていたら、ここまで何も知らずにいられるのか。

子爵家での教育がなっていないにも程がある。
本人以上に子爵家当主を疑ってしまう。

もしや子爵家には何か問題があるのでは？

私の見る限り、令嬢は常に真面目に授業に取り組んでいる。

別人を送り込んだとか？ 彼女が平民なら、ここまで無知なのも理解できる。

これは、確認する必要があるそうね。

そして、この令嬢（仮）は引き続き私が教育しよう。

教えたことを理解し、分らないことは質問する、素晴らしい生徒だ。

目に見えて成長する姿が教師冥利に尽きる。

こうして、令嬢（仮）との時間は、すぐに過ぎた。

もつと時間を取りたいが、これ以上は令嬢（仮）の負担になる。

平民の子がこのように長時間勉強したことはないに違いない。

あーこの高揚感、何年ぶりだろうか。ステファニー様を教え始めた頃が蘇る。

だが、あの時は暫くすると気持ちが悪く落ち着いた。侯爵令嬢の成長にかげりが見えてきたせいだ。

彼女は悪くない。ただ一日一日を必死にこなすだけで、自らの意欲が見えなかった

のだ。

子爵令嬢（仮）もステファニー様と同じになってしまいかと思うと、虚無感に襲われる。

焦ってはいけない。今のペースで十分優秀なのだ。

欲張ってはいけないと己を律しながら、私は王妃教育を続けた。

今ではもう令嬢（仮）を受け入れている。

彼女は子爵が用意した替え玉だと結論づけた。

あの報告書の女が目の中の令嬢（仮）なわけがない。

こんなに勉強熱心な子が婚約者のいる男性に近づき、娼婦のように振る舞うなんて考えられないじゃないか。

私には分かる。

こちらの令嬢（仮）は子爵令嬢とは完全に別人。

もう一度、令嬢（仮）を調査した方に確認を取らなければ。

替え玉を受け入れるには、何かしらの契約があったはず。もしかしたら、令嬢（仮）の家族が人質に取られている可能性もある。

私が助けなければ。

——貴方は心配することなく勉強に励みなさい。
私が全て解決してあげますわ。
そう誓ったのだった。



王妃教育はとても有意義で面白い。

時間が過ぎるのがあつという間で、まだまだいけるのに終わってしまったのが残念だ。
「また明日もよろしくお願いいたします」と頭を下げると、教師が満足げに頷くのが見えた。

実は、王妃教育が終わってからの辛いのだ。

毎回、ビンセント殿下と二人でのお茶会が開かれていた。

殿下が幸せそうで、気の毒になってくる。

「貴方が想いを寄せていた子爵令嬢はもういませんよ。私は別人です」なんて言ったら、彼はどんな反応するんだろう。

哀れなほど、目の前の男は浮かれていた。

あまりに幸せそうで、ソフィアがもういいことを言い出せない。

王太子という立場を考えれば、彼のパートナーは子爵令嬢より侯爵令嬢が良いのは明白だ。

だけど、何故か側近達はソフィアを受け入れていた。

きっと彼らは殿下に逆らえない立場なのね。

友人のような関係なら、私のような人間が近づくのを見過ごさないはず。

もし、私が離れたら殿下はどうなってしまふんだろうか？

国王陛下や王妃陛下だけでなく貴族達からも冷たい仕打ちを受ける可能性は高い。

自業自得なのだろうが、なんだか切なくもあった。

あの側近は最後まで殿下の傍にいてくれるのだろうか？

私のせいで一人にさせてしまうのは申し訳ない。

婚約者以外の人に懸想する殿下は許されないが、そうさせたのはソフィアだ。

いや、本来、私は関係ない。けれど、周囲から見れば、私の存在がなければ誰も傷つ
かずに済んだ。誰かが罰を受けるならそれは間違いないソフィアだ。

罪を償うなら私しかない。私なりの罪滅ぼしを。

私にできることは殿下の好感度を少しでも上げること。

ピンセント殿下とステファニー様の仲を元通りにするのが一番だが、私にそのような能力はない。

噂によると殿下と侯爵令嬢の仲は良くないどころか最悪。それをどうにかするのは私には無理だ。

それに、格下の相手に婚約者を奪われ、更にその女に殿下との仲を取り持つてもらったなんて、バカにしていると思われる。侯爵令嬢の矜持^{きんじ}を傷つけるどころか家門に喧嘩を売っていると取られるに違いない。

侯爵家対子爵家なんて、誰が考えても勝敗は決まっている。

そんな恐ろしいことはできないので、そこは本人同士に任せよう。

私は殿下の好感度を上げること、その一点のみに集中する。

聞いたところによると、殿下は偏屈で、使用人だけでなく騎士に対してもかなり横柄だとか。

そこら辺を改善すれば、殿下の印象は多少は良くなる。そして、そう導いた私にも少しは温情をかけてもらえるのでは、という邪な計画^{よこしま}だ。

私は今日から少しずつ殿下を誘導しようと決めた。

「王妃教育の調子はどうだ？」

「はい。厳しくはありますが、とても丁寧に教えていただいて、とても感謝しております」

「無理はしていないか？」

「ふふ、殿下はお優しいですね。私は大丈夫です」

「そうか、何かあればいつでも頼ってくれ」

「はい。ですが、これ以上頼ってしまったら私、殿下なしでは生きていけなくなってしまう」

「それくらい頼ってほしい」

素敵な笑顔の殿下に、気持ちを持つていかれそうになる。

「まあ、頼もしいですね。ですが、私は殿下に頼るだけでなく、隣にいて相応^{ふさわ}しい人間と思われないのです。なのでもう少しだけ頑張りますね」

「そうか、分かった」

「ふふ、私は幸せです。殿下に心配していただいて」

殿下はとても満足げな顔だ。

女性に頼られて嬉しいってやつですかね？

こうやってソフィアは殿下の懐に入っていったのかな。

ソフィアになりきらなきゃと思って会話しているけど、前世ではこんなことをしたことがない。

むず痒い^{がゆ}気持ちになり、私は会話を変えた。

「――王宮は素晴らしいですね」

「そうか?」

「そうですよ。庭が美しいのも、王宮が清潔なもの、一流の方達が日々丁寧な仕事をなさっているからですわ」

「王宮はそういうものだ」

「私、庭や王宮を拝見したいです」

「そうか、なら庭を見に行くか?」

「よろしいんですか?」

「ああ、当然だ」

「やはり殿下はお優しいですね」

散歩していれば会話がなくても許されるよね?

少し気を紛らわしたい。

席を立つと、当然のように殿下がエスコートしてくれた。



優しい方だ。

誰にでも優しいは優しくないとか、優しいと優柔不断を間違うとか、前世では色々聞いたが、彼はどの「優しい」だろうか？

「殿下は使用人の方に声をかけたりなさるのですか？」

「ああ、欲しいものがある時は命じるな」

命令か……

「それ以外の会話はされないのですか？」

「する必要がないな」

殿下はちよつとぶつきらぼうな言い方になる。

不器用なのかな？

「そうなんですか？ では使用人の方は寂しいですね」

「……そうは思わないだろう」

何、その間？ え？ 何かあるの？

「そうですか？ 私は殿下に声をかけられると嬉しい気持ちになりますよ」

少し探りを入れてみる。

「声をかけたただけですか？」

「勿論です」

「……なんて声をかけるんだ？」

「んー掃除をしてくださる方にはいつもありがとうとか、王宮が綺麗なのは君達のお陰だ、感謝する、なんて言われたら、皆さん喜ぶと思います」

「……………」

「今、あの方に声をかけてみてはどうですか？」

「……どんなふうに？」

「いつもありがとう感謝している、でよろしいかと」

「分かった、言ってみよう」

殿下が通る時は、使用人達は立ち止まって頭を下げ立ち去るのを待つのが決まりらしい。

普段なら足を止めることなく通りすぎる殿下が立ち止まったことで、使用人達は身構えた。

「いつもありがとう、感謝している」

それだけ言って殿下は立ち去った。

彼にはそのまま歩き続けてもらい、私が使用人達の様子を確認する。

彼らは驚いた顔でこちらを見ていた。

今まで使用人を一切見向きもしなかった殿下からの、突然の感謝の言葉。

使用人達はお互いの顔を見合わせ、困惑している。

「どうだ？」

「皆さん驚いていましたが、きつと喜んでいますよ」

「そうは思えないが……」

「私には分かります、私を信じてください」

殿下の顔を見て、信じられないという彼の思いが伝わってきた。

それでも私の言葉通りに行動したのは、それだけソフィアを思っていることだ。

殿下のソフィアに対する気持ちは本物なのかもしれない。なんだか切なくなってくる。

殿下は純粹すぎる。

ソフィアがどんな考えで殿下に近づいたのかは分からなかった。

純粹に好きだったのかもしれないし、権力を欲したのかもしれない。

今の私に知る術はない。

私が言うのもなんだけど、ビンセント殿下には幸せになってほしい。

「——ここが王宮の庭だ」

「綺麗ですね」

「綺麗？」

「ええ、美しいですよ」

「綺麗なのは当たり前だと思っていた」

「当たり前を作るって大変なんですよ。一度や二度ではなく長い年月をかけて当たり前を作るんです。王宮での当たり前前は凄いいことなんです。皆さんは殿下が優秀なのは当たり前前と思っていますが、実際、殿下は努力されているではありませんか。それと同じです」

殿下の表情が曇る。

「私は知ってますよ、殿下が日々努力なさっていることを。そんな殿下を見ているから、私も努力しなければって思えたんです。殿下の言葉や行動は人を変えます。私は変わりました。私が王妃教育を頑張れるのは、殿下がいてくれるからです」

殿下は急に考え込んでしまった。
私、間違ったこと言った？

「殿下？」

「そうか……」

「え？」

「私は誰にも認められず褒められることもなかった。それは私が、誰のことも認めず、褒めなかったからなのか？」

「……そうかもしれません、そうじゃないかもしれません。より良い関係を築く^{きず}には相手に敬意を払い、尊重し、認め合うことが大事だと、私は考えてます」

「……」

「そう思っているだけでも失敗することは、あります。良かれと思った言葉でも、相手を傷つけてしまうことも……。そこは会話をしないと分かりません。短い会話でも頻度が増せば、互いに分かり合えるかと。殿下は不安なことがあるんですか？」

「私は……皆に良く思われていない」

「何故そう思うんですか？」

「……」

「会話してみないと分かりませんよ。お互い誤解している可能性もあります」

「……」

「会話……怖いですか？」

「私は……彼らを避けていたし、彼らも……」

「怖いという感情は、知らないから起るんだと思います。相手を知っていきましよう。まずは会話です……殿下。頼りないかもしれませんが、お役に立てるよう、私がお傍にいます」

「……ああ」

気のせいかな殿下の表情が変わったように見える。

今まで、辛かったのかな？ 王太子というプレッシャーに押し潰されないように……でも……怖い？

王族が使用人を怖がるのが不思議だ。

認められない、褒められない、失敗は許されない。そんな環境が苦しいんだろう。

誰か無条件に味方でいてくれる人はいなかったのかな？

国王陛下や王妃陛下は殿下の苦しみに気付かなかった？

ピンセント殿下は必死にあがいているように見える。

「殿下、あちらに庭の手入れを担当している方がいますよね。彼にも声をかけてみてはいかがでしょう？」

殿下からの返事はない。

「殿下は、この庭を見てどう感じましたか？」

「いつもと同じだ」

「そうですね、その『いつも』を作るために、毎日あの方は手入れをしています」

「ああ」

「殿下は枯れた花をご覧になったことがありますか？」

「いや、ないな」

「それらは全てあの方が手入れをしてくださっているからです。殿下は病気になった花に気付いたことはありませんか？」

「……いや」

「あの方はすぐに気付くと思います。他の方が気付かないうちに問題を見つけて解決し、私達に問題があったことを悟られないようにしているでしょう。常に綺麗な庭にしておくことが、あの方がするべきことだからです。あの方がいるから、王宮の美しい庭が保たれているんです」

「……ああ」

「殿下は庭について、あの方とお話しされたことはありませんか？」

「……ない」

「あの方は殿下に声をかけられることがなくとも、毎日王家のために働いてくださっ

ています。認められず褒められることもなく、黙々とご自身の仕事をこなしているのです」

「……」

「今の思いを、正直に話してみてはいかがですか？」

「さすがのようにこちらを見つめる殿下はなんだか子犬のよう。」

「何かしたい、だが何をどうしたら良いのか分からないそんな表情だ。」

「殿下は、この庭どう思いますか？」

「……綺麗だ」

「それだけで十分ですよ」

殿下は庭師のもとへゆっくり歩き始めた。

庭師は後ろから殿下が近づいているとは気付かず、ひたすら真面目に自身の仕事をこなしている。

どうするべきか分からず、殿下は声をかけられずにいるようだ。

「殿下、とても素晴らしいお庭ですね」

私の声に、庭師は慌てて立ち上がり、帽子を脱いで殿下に頭を下げた。

「ああ、綺麗だ」